

古代エジプト ラメセス王朝期における 墓掘り労働者の「ストライキ」

秋 山 慎 一

I はじめに⁽¹⁾

古代エジプト新王国時代、王墓の墓を造営する専門労働者集団が組織された⁽²⁾。彼らは自ら生活物資を生産する必要がなく、当局からの配給によって生活を賄っていたといわれている。しかしラメセス朝もラメセス三世の時代になると、労働者への支給が滞り、労働者がストライキを起こしたといわれている⁽³⁾。この労働者の「ストライキ」にかんして、今日ではほとんど常識化した事実であるかのよう⁽⁴⁾に記述されている。エジプト語に「ストライキ」という語は今日までのところ知られていない。それにもかかわらず墓掘り労働者の「ストライキ」がいかなる根拠で主張されたのかその原点に立ち返って再検討を試み、更に「ストライキ」の年とされる年の他の年紀史

料を見ていくことでその年がどのような年であったのかを概観し、「ストライキ」をめぐる関連史料についても検討し、古代エジプトにおける「ストライキ」に関する問題点を明らかにしていきたい。

「ストライキ」が記録されている史料として最も著名な史料はいわゆる「トリノストライキパピルス」と呼ばれている史料であろう。本稿では基本テキストともいえるべき「トリノストライキパピルス」をまず取りあげ、これを基点として考察を展開していきたい。

II トリノストライキパピルスについて

現在このパピルスはイタリアのトリノにあり、Papyrus Turin Cat. 一八八〇という番号が与えられている。尚このパピルスがどのような経緯で現在のトリノの博物館に収蔵されるようになったの

かいはゆるその由来については記述がないため不明である。最初の刊行はRossiによるファクシミリとPleyteによる内容解説が添えられて刊行された⁽⁵⁾。しかし当時は内容の把握が不十分であったように思われる。その後、Spiegelbergが、この刊行を用いて僅か二五頁の小冊子ではあるがこのパピルスの部分的な翻訳と添えて、その解釈および考察を発表し広く知られるようになった⁽⁶⁾。しかしSpiegelbergは「ストライキ」という語は用いず終始「労働運動 (Arbeiterbewegung)」という語を用いて表現している。その後このパピルスはPeetなどによる研究やCernyがGardinerとともにトリノでヒエラティックをヒエログリフに翻字する作業を経て、更にGardiner自身による厳密な校訂作業の結果が刊行され、現在はこの校訂本が当該パピルスに関する標準的校本とされて広く用いられるに至っている⁽⁷⁾。しかしGardinerは翻訳は添えずにヒエログリフの翻字を刊行したにとどまっていた。このパピルスの翻訳はEdgertonによる⁽⁸⁾ものが今日でも基本的なものとされている。

Gardinerの記述に拠れば現状で幅四〇・五cm長さ九一cmのパピルスで表側は四つのコラムより成り裏側は八つのコラムより成っている。既述した通りGardinerの校訂本が現在エジプト学界で広く用いられているため、便宜上Gardinerの校訂に基づいて翻訳を試みることにし、パピルスに記載された期日の順には一致しない⁽⁹⁾。もともとこのパピルスの解釈自体難解であり、構成そのものも複雑である。構成解釈の詳細をここで論じることには紙面の関係上無理が

あると思われるため、かかる問題は別稿にゆずることとし、本稿では「ストライキ」に問題を絞るため、まずパピルス全体の暫定的翻訳を試み、「ストライキ」という表現上の問題、「ストライキ」が行われたとされる年次の問題を概観してから順次内容的検証に移っていくのが妥当であろう。

III トリノストライキパピルスの全訳

(vs. I, I) 彼らのネクロポリスに水を運んでくる者

水運び

アメンカアウ

ウセルマアトラーナクト

パアアン

イウエフェルイク

パアネジエム

パアレフニナクト

合計 六人

青物野菜を運んでくる者

チャイエニアニ

ペンタウエルト

アメンカアウ

バアクエンコンス

／／／／イピ

合計 三人

樵

イリ

合計 三人

漁師 ペンタウエレット

プラスタ―職人 バアクエンコンス

彫刻師 // // //

(vs. 2, 1) 魚運び コンスメス

カアエムメト

ペンパアケンテイ

アメンエムヘブ

封印を開ける者 チャアア

(vs. 3, 2) 治世二九年アケト三月二日

ネクロポリスのセムデトの仕事

書記ホリと書記アメンナクト、二人の職長と労働者全体による

(vs. 3, 5) 水運び

水運びの長 ペンタウエレット

水運び ケネル

水運び ウセルハアトナクト

水運び⁽¹¹⁾ ペンニウト

〔船〕⁽¹¹⁾ 水運び カアエムテリ

〔船〕 水運び パアアジャジャ：?? 二人

(vs. 3, 12) 青物野菜を運んでくる者

園丁師 パアカアル

〔船〕その助手 パアイルス

園丁師 パアスメンナクト

古代エジプト ラメセス王朝期における墓掘り労働者の「ストライキ」

〔船〕?その助手 アメンエムヘブ

園丁師 パアヘリペジエト

〔船〕?その助手 レム

(vs. 3, 19) 魚運び

漁師の長 スウテク

漁師 ブウテフゲレグ

漁師 ネブメヒ

漁師 カアエムメト

(vs. 4, 2) 樵

メンチュウイア

パアトウトウ

(vs. 4, 6) プラスタ―職人

〔船〕 ペンタウエレットの息子ウエネンフェル

門番ペンタウエレット

(vs. 4, 9) 洗濯師 ホルナクト

プタハメス

大工 アアメク

(vs. 5, 2) 治世三九年アケト四月末日

ウセルハアトが医師に与えた物の残り

金属の残り 一 四デベン相当

切ったリンネル 一カル 五デベン相当

サンダル 二 四デベン相当

木材	一	? 相当
蓋		一 / 四デベン相当
切ったリンネル	一カル	五デベン相当
メルヘト脂	二ヒン量	二 / 四デベン相当
シェケル材	一	二デベン相当
リンネルの敷物	一	一 / 二デベン相当
メナトナクトの持ち物とウセルハアトの手元にある物とが分けられるであろう。		合計二二デベン
レッドジャスパール製のビーズ		
木材	三	一五デベン相当
シェケル材	一	一〇デベン相当
象牙製の櫛	一	二デベン相当
サンダル1		
アド脂	一ヒン量	一 / 二デベン相当
		合計 三〇 一 / 二 デベン
(vs 6,15) ⁽¹²⁾ それ(?)とともに倉庫…オリックス…		
(vs 6,16) 彼女のためのシャアド		
	一	一八デベン相当
(vs 6,20) 彼のために銅二〇デベン、彼女のために銅一〇デベン		
		合計 三〇デベン
(vs 6,2) ウセルハアトがケンベトの御前にて、すなわち職長カア、		

書記アメンナクト、全労働者の前でこう言った。「アメン神にかけて、支配者にかけて、私の三人の子供達は私から離れないであろうし私も三人の子供達を離さないであろう。」
(vs 1a) 治世二一九年ペレト二月一日書記ペンタウエレットが持ってきた物

シャアブパン 二八
シャアブパン 二七
合計 五五

(vs 2,8) 治世二一九年ペレト二月二日

門番カアエムウアセトが書記二人と職長の御前で言った「アメン神と支配者にかけて、私は右班より水運び一二人を、左班より二人合計二四人を置くことはない。私は右班より漁師一〇人を、左班より一〇人合計二〇人を置くことはない。私は右班より樵七人、左班より七人合計一四人を置くことはない。私は園丁師六人を右班、六人を左班に置くであろう。ナツメヤシ取りを一人右班、一人左班合計二人を置くであろう。大工四人を右班、四人を左班合計八人を置くであろう。洗濯師四人を右班、四人を左班合計八人を置くであろう。私は…を見つけ、私は宰相の前に置かれてあったものをとってきた。…彼が生きない?…」

(vs 3,1) 治世二一九年ペレト二月一〇日

全労働者が五つの壁を越えて王宮の奥へと入り込んでいった。三人の *hutyw* と副官、二人のウアレト役人がそれを見に入ってきた。彼らは治世二一九年ペレト二月…日より外の道でトトメス三世神殿の

裏手に座り込みをしていた。

(vs 3,24) 治世二九年ペレット二月一七日 二月の穀物支給

職長 七二／四カル

書記 三三／四カル

八人の労働者、おのおの

五二／四カル 合計四四カル

左班職長 七二／四カル

書記 三三／四カル

八人の労働者、おのおの

五二／四カル 合計四四カル

二人の門番、四人の洗濯師

合計：三七：三：合計 四〇

(vs 4,12) 園丁師パアカアルによるネクロポリスのための野菜の全部

職長 一七〇

書記 八五

労働者 一人 一五

労働者 八人 三五〇

合計 六二〇

(vs 6,6) 職長

カア 水 一七二／四カル 消費した分として

パバサ 八三／四カル

カアウイア 八三／四カル 合計三五

古代エジプト ラメセス王朝期における墓掘り労働者の「ストライキ」

書記アメンナクト

再び 八三／四カル、
二二／四カル、

合計一一二／四カル

合計一〇〇、残り水 四七カル

カアエムウアセト 一二カル

メリラー 二二／四カル

メス 一七二／四カル

ネフェルヘテプ 八カル

カアエムイペト 八三／四カル

ケンナ 八三／四カル

ウエネンネフェル 一二二／四カル

ホリ 八三／四カル 再び 卡尔⁽¹³⁾

ウアレト役人レッシュペティエフ

水 三一／四カル

(vs 7,1) 治世二九年シエムウ一月二五日

ラメセウムで労働者は私がそこにいるのを見つけた。彼(私)は

彼らに言った「私はアメンの主席神官に町の長 (*ps h'et n niwt*)

の件について訴えるために町へとやって来ました。彼は彼らにラメ

セウムの神の供物の食物を与えませんでした。彼が行ったことは重

罪です⁽¹⁴⁾

(vs 8,1) 魚。ペレット二月までの(?)。の

手により右班へ。アケト三月一〇x日。アケト

四月。／＼／＼アケト四月。／＼／＼ペレト一月三日今日：合計：
／＼／＼

(rt. 1.12) 治世二九年ペレト二月一〇日、この日労働者が次のように言いながらネクロポリスの五つの壁を越えた。「私たちは空腹だ。一八日という日が入ってから過ぎた」彼らはトトメス三世の神殿のところで座り込んでいる。ネクロポリスの書記と二人の職長、二人の代理人、二人のウアレト役人がやって来て彼らにこう言った「中に入ってください」。

彼らは大いなる宣誓でこう言った「こっちへ来い。我々の手元には王の言葉があるんだぞ。昼はこの場で、夜はネクロポリスで」という」

(rt. 1.6) 治世二九年ペレト二月一日

彼らは再び通過し、ラメセウムの南の端の門のところまで達した。

(rt. 1.7) 治世二九年ペレト二月二日

ラメセウムに入り、その入り口のところ⁽¹⁵⁾で、夜を過ぎ、その中へ入った。

書記ペンタウエルト、二人のメジャイの長、二人の門番、ネクロポリスの倉庫の三人の(?)門番、／＼／＼メジャイの長メンチュメスが町へ／＼／＼こう言った「私が市長を連れてこよう」彼は／＼／＼／＼私は彼にラメセウムの彼らのネクロポリスのことを言い、彼は私にこう言った。

／＼／＼／＼

計量の書記ヘドナクトとこの神殿のイトネチュエル神官は彼らの次のような言い分を聞いた。つまり労働者が言うには「俺達がここへやって来たのは、飢えと渴きのためなのだ。服もなければ油もない、魚もなければ野菜もない。我々のすばらしきご主人様であらせられます王に手紙を書いて下さい。そして我々のご主人様である宰相にも「俺達に生命の糧⁽¹⁶⁾をくれ」という手紙をかいてくださいますように。」

ペレト一月の支給がこの日に行われた。

(rt. 4.23) 治世二九年ペレト二月二三日、ネクロポリスの倉庫でメジャイの長メンチュメスが言った「よし、私はお前さん達に私の答えを言おう。上へ行って、道具を集め、扉を閉めて、妻子を連れてこい、そうしたら私はお前さん達を先導してセティ一世葬祭殿へ行くだろう。そして私はそこに明日お前さん達を坐らせるだろう」

(rt. 2.6) 治世二九年ペレト三月x日

労働者が壁を越え、ネクロポリスに座り込んだ。三人の *hutw* が彼らを連れ出しに出ていった。そうしたら労働者アナクトの息子メスがこう言った「アメン神にかけまして、支配者方のお力は死よりも偉大であるというお方にかけまして、今日私をここから上へ引きづり出したなら、墓泥棒の仕度をしてから寝ることになるし、この宣誓をしなければ、私を処罰したのはここで王名の誓いを私がしたからだということになるであろう。」

労働者は壁を越えて出て行って、町の後ろまでやって来た。三人

の *hwtjw* は町の壁のところから大きな声を彼にかけた。ネクロポリスの書記アメンナクトは二人のウアレト役人と二人の副官に彼ら連れ戻させるべく。ウアレト役人であるレッシュペティエフは私たちに言いやって来た。レトの息子ケンナとフィの息子ハイイが言った「私たちは戻らない。そうご主人様にお伝え下さい。」

彼らは *hwtjw* の前に立っていた。「なるほど私たちが壁を越えたのは飢えのためではありません。私たちは言うべき大切な言葉を持っています。なるほどファラオのこれなる場所で悪いことが行われました」と彼は言った。こうして私たちは彼らの言い分を聞きに出でいった。彼らは私たちにこう言った「確かにそう言った」。

(Pt. 2, 18) 治世二九年ペレト四月二八日、セド祭のために南の地域より神々を集めにやって来た後で宰相タアは川を下って行った。メジャイの長パアネヘシの息子ネブスメンは労働者の三人の *hwtjw* に言うためにやって来た。彼ら(労働者達)はその時ネクロポリスの倉庫にいたのだった。次のように彼である宰相は言った「私がお前達の許にやってこなかったのは良い理由がないためなのか、私がやってこなかったのはお前達のところに何も持ってくるものがないからということではないのだ。お前達は「支給を取っていくな」というが、私が盗みをするために任命された宰相とでも言いたいのか。私のような者が、行われたことを私が与えないとでも言うのか。たとえ仮に倉庫になくとも、私が見いだしただけのものはお前達に与えるぞ。」

ネクロポリスの書記ホリが彼らにこう言った。「お前どもに半分
の支給をしよう。私自らがお前達に支給しよう。」

(Pt. 30) 治世二九年シエムウ一月二日 ウセルハートの息子アメンナクトがシエムウ一月の支給として労働者に二カルの小麦を与えた。職長コンスがこう言った「よし、お前達に言おう。支給を受け取れ。そして岸边へ、倉庫へ下りて行け。宰相の子供達にそのことを彼に(宰相に)言わせよう。」

書記アメンナクトが彼らに支給を与えてから、彼らは彼が彼ら(労働者達)に言ったように、岸边にそれらを置いた。壁の一つを越えた後に書記アメンナクトは行って、彼らに言った。「岸边へと通り過ぎるな。確かに私はお前達に今二カルの小麦を与えた。でももしお前が行くなら私はお前がどこへ行こうともありとあらゆる法廷にその罪悪を告訴し、私は彼らを上連れ戻すだろう。」

(Pt. 3, 14) 治世二九年シエムウ一月一三日、労働者達が次のことを言いながら壁を越えた「俺達は空腹だ。」そしてメルエンプタハの葬祭殿の裏手に座り込んだ。彼らは市長が通り過ぎるとき市長に向かつて呼びかけた。そこで市長は彼らのもとに家畜の長の園丁師ミンネフェルを呼び寄せてこう言った「よし、私がそなた達に王が支給するまでの糧として五〇カルの小麦を与えよう」

(Pt. 4, 1) 治世二九年シエムウ一月一六日 労働者ペンアンケトが書記アメンナクトと職長コンスにこう言った「あなた様方は私のご主人様で、ネクロポリスの管理人様でございます。わがよきご主人

様であらせられます。セジュファ・テルの宣誓でこう仰いました。
 “私は言葉を聞かないであろう。大いなる深い場所での罪も見ることもしないだろうし、それを隠すこともしない” さてウセルハアトとペンタウエレットはオシリスなるラメセス二世の墓の上から石を取ってきた。そして彼はウセルマアトラ・セテペンラーの家の火でもって焼かれた一頭の家畜を持ち去った。それは彼の小屋の中にあつた。さて、彼は三人の女性と姦通した。女市民メナト、彼女はケンナの妻であつた。女市民アイウネス、彼女はナクトアメンの妻であつた。女市民タアウエレットヘテプティ、彼女はペンタウエレットの妻であつた。さてあなた様方は宰相ホリの立っている場所、その場所というのは石が運び出したその場所を、ご覧になりました。(そしてその時にこう) 言われたということです、「私の父であります職長パアネブが人々に、そこから石を運ばせた」と。そしてレトの息子ケンナもオシリスなるウセルマアトラ・セテペンラー、大いなる神の王子の墓の上から、それと全く同じ事をしたのでございます。あなた様方が彼らにすることを私に見せてください。そうすれば私は我がご主人様であらせられますファラオにも、また私のお頭さまであります宰相様にも同様のことを言うでしょう。以下の三つの文言は表側に付け加えられた覚え書きであろうと解釈できよう。

(Ft. 2.1) 治世三一九年シエムウ一月二日 書記アメンナクトの息子ペンタウエレットの死。

(Ft. 3.18a) 彼は言った「ウセルハアトが彼のIsをとって、それを王妃のネクロポリスに置いた」⁽¹⁸⁾

(Ft. 3.20) 治世三〇年アケト二月一〇日 この日神殿の書記ホリが秘密のネクロポリスの書記アメンナクトにこう言った「火に油／＼／＼しない。書記パバサは／＼／＼。」

この内容を一読して判るとおり、このパピルスは連続した統一的内容の記述ではなく、主として裏側には物資の支給記録が記されており、表側には「壁を越えた」という記録をはじめとした様々な記録があることがわかる。すなわち、今日「ストライキ」の記述とされている内容記述もこうした様々な記録の一つとして書かれていることがわかる。

このパピルスはその日付からみると表側の方が裏側の日付より後の日付になっており、これは表側の記述が本来あったものを消してその上に新たな別の内容を記したためにこのような現象が生じているものと解釈されている。⁽¹⁹⁾

IV 「壁を越える」||「ストライキ」?

既に述べたとおりエジプト語に「ストライキ」を表現する名詞一語での語彙はみいだされていない。Spiegelberg以降「壁を越える」という表現をもって労働者が自らの仕事を放棄して、彼らの本来の仕事、ここでは王墓の造営という仕事に直接従事しないということ

を Spiegelberg が「労働運動」という用語を用いたものの、しばしば慣用的に「ストライキ」という語を用いて表現するようになった⁽²⁰⁾。ここではこの「壁を越える」という表現について、その史料中に見られる全用例をあげて検証を試みたい⁽²¹⁾。

まずトリノストライキパピルス中において「壁を越える」という表現は八箇所で見られる⁽²²⁾。

裏側に見られる一例を除いて全てが表側で見られ、全ての例において行為の主体者 (agent) は労働者であり、動詞は *ss* という動詞を用いている。vs. 3,1+rt. 1,1で「五つの壁」という表現が用いられている以外は *inbw* という「壁」を表す複数形が用いられている。

まず「壁」という名詞に関して、その用例を検証していきたい。

O. Cairo CGC 25530, 1-3

*hsbt 29³bd 2 (nw n) prt sw 10 hrw pn n sni ir n ts t st ts
inb p³yw diw*

krw 11 m nitt

「治世二九年ペレト二月一〇日この日、労働者は彼らの支給のために壁を越えた。一一日 また同様」

このオストラコンはいわゆるネクロポリス・ジャーナルと呼ばれるディーラ・アル・マディーナの労働者が何を行ったか、何があったかという記録をしている史料の一日の記録であり、この記録から労働者が「壁を越えた」のは一〇日と一一日の二日間であったこと

古代エジプト ラメセス王朝期における墓掘り労働者の「ストライキ」

が窺える。このあとには一三日の項目になり二日の項目はない。ちなみに一三日の項目はメジヤイの長が何かをした記録であるが保存状況が良好でないため文意不明瞭である。

O. Cairo CGC 25533 vs. 9-10

dit diw

...*hrw 21 iw = zn wh³ / / / / ... / / / / n³ diw ss inbw*

ir n hrw 11. hrw 22 iw = w b³k...

「一一日彼らは...を要求した(?)...支給。壁を越えて一一日間になる。一二日彼らは働く」

二二日の項目の上以後での書き込みと思われるものがあり *dit diw* 「支給が行われる」と読める。記述内容からして、この史料もネクロポリスジャーナルと呼ばれるものであり、労働者の出欠勤の記録とその他の記録が日付ごとにほぼ連続して記載されている。この記録に先行する日付が八日の記録であり、次の記録が二二日の記録である。途中に欠損部があるため必ずしも明らかではないがほぼ連続した記載であると解釈してよからう。

ODM 38, 22

*hrw 27 iy-(r)-niwt = f, hrw 28³ny-nbt, hrw 29 nfr-hr
iw = w ss inbw r^hiw = w sni*

「二七日イイエルニウテフ、二八日アニナクト、二九日ネフェルヘル

へル 彼らは壁を越えた。末日再び彼らは(壁を)越えた⁽²³⁾」

この史料は輪番表と薪や魚、野菜などの物資の支給記録が記されている。二九日に労働者は「壁を越え」翌日もまた越えたこと読むことが出来よう。

ODM 571, 3-5

ss̄ ḥr = sn ḥnbw ḥw = w wr̄s̄... p̄ḥtm n p̄3 ḥr. bwpwy nw r =
s ḥw = whr whm ḥw = w ḥ3y r mryt m ḥsbt 93bd 4 (nw n)
šmw sw 16

「彼らは壁を越えた。彼らは昼はネクロポリスの ḥtm で過した。しかしそれは見つからなかった。彼らは治世九年シエムウ四月一六日再び mryt と下りつゝした。

ここで挙げたのはデイル・アル・マディーナの労働者が彼らの仕事と関連してみられる ḥnb 「壁」という例である。⁽²⁵⁾ 全ての例で「壁」という語は越えるものの対照として述べられている。⁽²⁶⁾ この名詞に関連する動詞は全ての例で ss̄ という動詞であり、この動詞についても簡単にここで触れておこう。

ss̄ と綴られるが中王国以降に見られる形であり、それ以前は sni⁽²⁷⁾とも綴られた。⁽²⁸⁾ この両者の語は同一の語の異綴りと解釈されることもあるらしい。⁽²⁸⁾ いずれにせよ本稿での関連で見られる例は全て ss̄ であった。ここ以外で (ss̄ という綴りの) この語が用いられている例は次の箇所で見られる。⁽²⁹⁾

O.Cairo Wb. Nr. A (新王国時代)

ss̄ = k ḥr = w ḥ3pw = sn kku

「汝が彼ら(=死者)のところを通り過ぎる時、彼らは闇に隠れる」

Pianch 82

n ss̄ ḥm = i ḥr niwt ḥtmw

「余は閉じられた町のどろろは通り過ぎなご」

P&R 98

hrw 2 wsft m p3 ḥr, hrw 3 ss̄ 10^(?),

「二日ネクロポリスで休み。三日一〇⁽³⁰⁾ // // // 通り過ぎる // // //

Anastasi V., 20,2

////// ss̄ t3 ḥnb. // // // 谷を通り過ぎる // // //

P. Anastasi V., 24,6-8.

ptr = n ḥr ss̄ p3 ḥtm n wsr-m3 t-r^c mry-ḥm n^c. w. s. nty m t-
l m ḥsbt 333bd 2 (nw n) šmw sw 23

「どうだこのとおり我々は治世三三三年シエムウ二月三三日にチェルにあるラメセスメリアメンの要塞を通り過ぎたのだぞ」

P. Anastasi VI., 54-55

tw = n grh = n m-dit ss̄ n-m-h s3sw n i-d-m p3 ḥtm n nr-n-
p̄th-ḥtp-ḥr-m3 t^c. w. s. nty t-k

「我々はエドムのシヤスの人たちをチェクにあるメルエンプタハへテプヘルマートという要塞のところを通り過ぎないようにさせた」

hrwuw nty ss' p3 htm n nr-n-plh-hlp-hr-m3's't'. w. s. nty
t-h

「チェックにあるメルエンプタハヘテプヘルマートという要塞を通り過ぎた日々」

Battle of Kadesh s30⁽³¹⁾

ss' hm = f3p3 htm m t-r

「陛下はチャルにある要塞を越えた」

以上が動詞 *ss'* の用例であるが、この例を一瞥してわかるとおり、大多数の用例において「(ある場所を)通り過ぎる」という意味で用いられており、更にその場所を越えて行くというニュアンスを含んでいるように解釈することもできよう。

以上の用例を纏めると、デイル・アル・マディーナの労働者の場合に関して、彼らが「壁」と呼ばれる場所を通り過ぎていくということは、ネクロポリスジャーナルにおいてみられるとおり、彼らが本来の仕事場に赴かず、別の場所へ行くという意味を含んでいるという解釈してよからう。

V 「ストライキ」の年

この「ストライキ」のあった年の他の史料はどうであったのか、「ストライキ」のあったとされるラメセス三世治世二一九年の他の史

古代エジプト ラメセス王朝期における墓掘り労働者の「ストライキ」

料を挙げて検討していつてみたい。すでにこの考察はJanssenによって行われているもの⁽³²⁾、本稿ではそれとは別に史料をまず年代順に並べ、検討を加える。

ラメセス三世治世二一九年の年紀を持った史料は以下のものを挙げることが出来る。

表1ではラメセス三世治世二一九年に属する史料を並べたが、どの史料もこの時期には極めてよくある類のテキストであり、トリノストライキパピルスにおける言及とペレット二月一〇日の日付のあるO. Cairo CG 25530がなければ労働争議が起きたことを窺わせる史料的事実はないことになる。

一方、この年に薪の配給の遅延が生じていたことについては既にJanssenの指摘がある⁽⁴⁰⁾。ODM 147およびO. Turin 57072を取り挙げて労働者に対する薪の支給が遅れたことを主張している。史料的には不足分が生じていることは明白である。薪は労働者にとっては燃料としての意味を有すると思われるためこれがないことには生活が成り立たないことは十分に予測が付くところではある⁽⁴¹⁾。

そもその墓掘り労働者の仕事の段階から考えていきたい。当時は岩窟墓という形式で王墓が造営されている。当然彼らの仕事には岩窟墓の掘削から壁面を成型し装飾を施すという段階がある。この年次の史料から見るとペレット二月九日にランプが支給され⁽⁴²⁾、翌日にはプラスト職人が指名されている⁽⁴³⁾。更に翌月の二三日にはインクが支給されているのである。この事実は岩窟墓を掘りはじめの段

[表 1]

日付	史料名	内容
シエムウ I, 27	O.Gardiner 154	ロバの賃借
シエムウ III, [x]	ODM 39	輪番表
シエムウ IV, 追加日	O.Gardiner 127	物資の支給 (出勤簿?)
アケト I, 19	ODM 165	物資の生産 (?) ³³
アケト II, 4	O.Gardiner 185	ロバの賃借
アケト II, 21	ODM 284	輪番表
	ODM 390	輪番表
	O. Berlin P. 10633	支給の遅れ
アケト III, 2	CGC 25592	穀物支給
アケト III, 7	ODM 530	薪の支給
アケト IV, 13-ペレット I, 23	O.Strassbourg H26	物資の支給
アケト IV, 19	ODM 263	食物の支給
アケト IV, 20	ODM 147 (-シエムウ4月末日まで)	薪の支給
	Graffito 18	書記ペンタウエレットの死 ³⁴
	CGC 25242	アメンヘテプ1世の神託 ³⁵
アケト IV, [x]	Graffito 3021	労働者のリスト
ペレット I, [x]	O.Strassbourg H26	物資の支給
ペレット I, 25	O.Campbell 9	支払い
ペレット I, 26	O.Turin 57007	ネクロポリスジャーナル
ペレット I, 27	Graffito 1649 ³⁶	日付のみ ³⁷
ペレット II, 8	ODM 394	魚の支給
ペレット II, 9	O.Petrie 5	ランプの支給
ペレット II, 10	ODM 330	プラスター職人の指名
	CGC 25530	穀物支給の要求 ³⁸
ペレット III,	O.Turin 57072	薪、穀物の支給
ペレット III, 23	O.Mond 179	インクの支給
ペレット IV, 15	ODM 64	ロバの賃借
ペレット IV, 28	El-Kab Tomb 4	宰相タア ³⁹

階というよりは墓造営の最終段階に入っていることを示唆していると解釈するのが妥当であり、プラスターを壁面に塗ってその上に彩色装飾を施すためにペレット三月二三日にインクの支給がなされた。この間の時間的な間隔は当該史料上からは四〇日あまりであったとみることができよう。さて、トリノストライキパピルスにおいて「ストライキ」はペレット二月一〇日とペレット三月に起こったことになっている。もしも「ストライキ」が全労働者を巻き込んでこの時期に起こったとしたらこの四〇日あまりの間に「ストライキ」も、また壁面装飾にも取りかかっていたことになる。

VI いわゆる「ストライキ」関連史料

既に一九世紀のうちに労働者の「ストライキ」の存在が主張されてきたが、根拠とされる史料はトリノにあるパピルスが基本的なものであることは言うまでもないが、他の史料も従来指摘されている。そうした史料のうちでストライキに関連するとされているテキストを二点訳出しておきたい。

治世二九年アケト二月二日。この日書記アメンナクトは労働者達にこう言った「今月に入って二〇日というものが過ぎた。でも我々に支給はまだない。」彼はアメンの家のジェセルケペルラーメリアメンの家へ⁽⁴⁶⁾行った。小麦四六カルがもたらされた。それは彼らにアケト二月二三日に与えられた。宰相タアが上下エジプトの宰相に任命された。

この史料では支給の遅延を指摘し、ホルエムヘブ記念神殿について、二日後小麦四六カルがもたらされ労働者に支給されたと解釈することが可能であろう。この事実は書記が労働者達を代表し、当局側に訴え、支給を実施させたことを示唆しているであろう。小麦四六カルという量は労働者全体に対する量と推測するのが妥当であろう。⁽⁴⁷⁾ 宰相タアを言及しており、このタアが「Kab Tomb no. 4」で言及されている人物と同一人物であると思われるが、宰相への任命が二一日のことであるのか二三日のことであるのか判然としない。しかしこのオストラコンで宰相への言及が存在すること、この宰相がラメセス三世の第一回目のセド祭に深く関与している人物であること、その人物の言及が墓掘り労働者の史料に言及されている事実は、この労働者が果たしていた役割の大きさを示唆するとともに労働者にとって上下エジプトの宰相たるいわば王に次ぐ地位にある人物が大きな役割を果たしていた事実を窺わせるものであろう。

次に挙げる史料は存在その物は古くから知られていたものの、長

古代エジプト ラメセス王朝期における墓掘り労働者の「ストライキ」

く満足な刊行がなかったオストラコンであるが、Eyreの刊行により用いることが出来るようになった。このオストラコンはSt Charles Nicholsonが一八五六／七年にエジプト旅行中に入手したもののことで現在はシドニーのNicholson博物館にある。年紀はないが内容的にトリノストライキパピルスとの関連が示唆されている。⁽⁴⁸⁾

O. Nicholson Museum R. 97.

(表)「ラメセス」ナクト、王の執事アメンカアウ、王の執事／／、町の／／／、町の計量の書記ホリ、／／／の計量の書記パセル、倉庫の副官メリプタハ、セム神官ジェフウテイ、／／／の到着(?)。そしてネクロポリスのhmnのところによって二人の職長、書記アメンナクト、書記ホリシェリ、全労働者に対して呼びかけた。

(裏)労働者は空腹の状態で、「我々が外へ出ていくのは空腹のためなのだ。木もなければ、野菜もない、魚もない」と言いながら外へ出ていった。「彼らは」ケンベトのセル役人に訊ねるためにやって来た。彼らは言った「／／／／は正しい」と。

石灰岩製のオストラコンの両面に書かれたテキストであるが、我々にとっての主要な内容は裏面より読みとることが出来るであろう。労働者達は空腹のためにケンベトのところによってきてセル役人に訴えて判断を求めているのであって、このセル役人というのが具体的にこのオストラコンの表側で述べられている「ラメセス」ナクト以下の人物のこと全体を指しているであろう。裏面の文末の

「 $\backslash\backslash\backslash$ は正しい」ところで訳したのは *ms. G. 11* の欠損部分を裁判文書での裁決を下すコンテキストで用いられる表現と比較して訳出したものであるがこの前後のフレーズからしてこのように解釈するのが妥当であろう。もしこの見解が正しいとするならば、労働者は支給の遅延に対してケンベトのセル役人のところに訴えに行き、セル役人が裁決を下していると解釈することも可能であろう。

結びに代えて

以上の考察により、本稿では労働者の「ストライキ」に関連してその根拠となる史料、背景となる時代、関連史料についてみてきた。纏めてみると、「ストライキ」という名詞一語での語彙がエジプト語に存在しないが、「壁を通り過ぎる」という表現が、ある種の労働運動を表現していると考えられてきた。この「壁を通り過ぎる」という表現が墓掘り労働者の本来の仕事から何らかの意味で離れることを意味していることは正しい解釈であろう。しかしこの解釈の背景には彼ら墓掘り労働者はデイル・アル・マディーナという村落共同体にいわば隔離された状態にあって外界との接触があまりない閉鎖環境の中で生活をしていたという大前提があつての解釈ではなかつたであろうか。確かに旧来の見解の中にはそうした閉鎖環境にあつたと解釈している研究者もいるであろうが、当時のデイル・アル・マディーナの社会が周囲と隔絶した社会という解釈は程度の

差の問題もあるもののあまりに不自然すぎはしないだろうか。彼ら労働者は一八王朝時代初頭に現在のデイル・アル・マディーナと呼ばれる地に居を構えて王墓の造営に従事してきたと考えられている。確かに考古学的事実がそれを物語っているが、もしそうだとすれば五〇〇年もの時間的な広がりがあり、その間には疫病などの大流行などにより人口の極端な減少もあつたであろうし、一方で人口の自然増も当然想定されなければならぬだろう。いくら西岸に生活するとはいえ西岸に生活していた農民などとの交流がなかつたと考えることがどの程度蓋然性を持つのか疑問である。多少の発展はあつたにせよあれほどの狭い空間に人々がひしめいていた。デイル・アル・マディーナの生活に関しては周囲の人たちとの具体的な交流がどの程度あつたのか、これらを客観的にみて、全体での彼のらの生活を考えていく必要があるのではなからうか。

このような背景の中で、「ストライキ」が起きたとされるラメセス三世治世二九年という年次を概観した時、プラスター職人の言及や、インクの支給などは墓掘りのはじめでは到底考えられず、彼らの労働者の仕事は最終段階におよんでいたと考える方が妥当であろう。通常王墓は王が即位してからまもなく建造が開始されると考えられているため、ラメセス三世王墓と解釈するには年次がやや遅すぎる感があり、具体的にどこの墓の造営に従事していたのか即断できない。ランプという岩窟墓の奥で建造に従事する際の照明器具が労働者に支給され、プラスターという岩盤の上に漆喰を塗りその上

に装飾を施すという手順を踏んだものと思われるが、そのプラスターを作る職人が任命され、インクが支給されている。このインクというのは壁面装飾のために使用されるものと解釈するならば、比較的短期間の間に作業を行い、この間に「ストライキ」という「労働運動」を起こしたと解釈をされてきたことになる。

ところで「壁を越える」という行為が、労働者が本来の墓掘り作業に従事していないことの一つの表現であるにせよ、「壁」というのがどのような場所に現実存在したものであるのか、実体はどのようなものであったのか必ずしも明らかにならない今日、「壁を越える」＝「ストライキ」あるいは「仕事をしないこと」＝「ストライキ」安易に結びつけるにはいかなるものであろうか。一つの表現が今日から見たら複数の行為・事象に相当する可能性も含め大局的な見地から再検討の余地が残されているのではあるまいか。

註

- (1) 本稿上梓に際し Wörterbuch der ägyptischen Sprache を作成する際のカードを自由に使用させていただく便宜を与えてくださった Prof. Dr. Reinecke 教授をはじめとするフンボルト大学のスタッフの皆様、著者の質問に快く応じてくださった Prof. Dr. Osing 教授をはじめとするベルリン自由大学の皆様には多大なる恩恵をうけむった。記して謝意を表する次第である。
- (2) Cerny, J., *A Community of Workmen at Thebes in the Ramesside Period*, Le Caire 1973. (以下 Cerny, Workmen 以下) Valbelle, D., *Les ouvriers de la tombe Deir el Médineh à l'époque ramesside*,

古代エジプト ラメセス王朝期における墓掘り労働者の「ストライキ」

- Le Caire 1985.
- (3) Bierbrier, M., *The Tomb-Builders of the Pharaohs*, London 1982, p.41. (邦訳: M・ヒアブライヤー著、酒井傳六訳『王の墓づくり』学生社一九八九・五三一―五五頁)。
- (4) Helck, W., Otto, E. (Hrsg.) *Lexikon der Ägyptologie*, 7 Bde, Wiesbaden 1972-1992 & Shaw I., and Nicholson, P., *The British Museum Dictionary of Ancient Egypt*, London 1995 (邦訳: 内田杉彦訳『古代エジプト百科事典』原書房一九九五でも「ストライキ」という項目があり、最近の概説でもしばしば言及され枚挙にいとまがない (e.g. 大貫良夫／前川和也／渡部和子／屋形禎亮著『人類の起源と古代オリエント』世界の歴史―中央公論社一九九八年五一―七―五二―頁)。
- (5) Playte and Rossi, *Papyrus de Turin*, n.p. 1869-1876. (以下 P & R 以下)
- (6) Spiegelberg, W., *Arbeiter und Arbeiterbewegung im Pharaonenreich unter den Ramessiden*, Strassburg 1895.
- (7) Gardiner, A.H., *Ramesside Administrative Documents*, Oxford 1948. (以下 RAD 以下)
- (8) Edgerton, W.F., "The Strikes in Ramses III's Twenty-ninth Year", *JNES* 10, 1951, pp.137-145.
- (9) Gardiner, A.H., *Ramesside Administrative Documents*, Oxford, 1948, pp.xiv-xvii (ペナルスに関する全体的記述); 45-58 (史料のユエログリフ翻訳および翻訳自体に関する脚注)。
- (10) 本稿では *ps-hr* を便宜的に「ネクロポリス」と訳しておく。この語については Ventura, R., *Living in the City of the Dead*, Göttingen 1986, pp.1-37 を参照のこと。
- (11) 船のサインがそれぞれの項目前に書かれている箇所がある。この意味については不明である。
- (12) vs 6,15; 6,16; 6,20 にそれぞれ独立した一行から成る項目がある。

- (13) ここでは単位のみ書かれていて、数値は書かれておらずブランクのままである
- (14) 裏面のコラム八は極めて断片的で各行でそれぞれ一語程度がようやく読みとれる程度である。
- (15) *pšhd* 「(サンダルなどを肩などに) かける」というのが原意。そこから派生して「(敵などを) 打ちのめす」などの意味が生じたらしい。この場合「逆を吊りにされて」というのでは意味が通らないので、「ぐったりして」くぐりの意味であろうか(?)
- (16) *n'nh* 「生命の腕」という意味だが、他に Peas.82 (R.125), Schott, S., Kanais, *Der Tempel Sethos I. im Wadi Mīa*, 143 にも見られる。
- (17) 私(宰相タア)の前任者が支給したのと同じ量の支給を私(宰相タア)がしないでももらいたいのか、という意味であると解釈される。しかしむしろ「墓」という語であるならば男性名詞であるはずで、このパピルスの場合には女性名詞として扱われている。意味不明の語である。しかし全体としてはウセルハアトが墓を荒らして王妃の墓に隠したということと表現していると解釈することも可能である。
- (18) *šw* というのはしばしば見られる語としては「墓」という語が想定される。しかしむしろ「墓」という語であるならば男性名詞であるはずで、このパピルスの場合には女性名詞として扱われている。意味不明の語である。しかし全体としてはウセルハアトが墓を荒らして王妃の墓に隠したということと表現していると解釈することも可能である。
- (19) RAD, xiv.
- (20) e.g. Petrie, W. M. F., *A History of Egypt*, 6 Vols., London, 1925³, Vol.3, p.153.
- (21) 既に Ventura, R., *op. cit.*, pp.120ff. において詳細な検証が試みられている。本稿では Ventura の恩恵にあずかりつつ、どのような動詞と共に用いられているのかをティール・アル・マディーナの労働者の活動の例を中心に考察しよう。
- (22) vs.3, 1 (RAD=49,15); rt. 1,1 (=RAD52, 14); rt. 1, 6 (=RAD53, 4); rt. 2, 7 (=RAD54, 13); rt. 2, 11 (=RAD55, 5); rt. 2, 15 (=RAD55, 11); rt. 3, 10 (RAD56, 13); rt. 3, 14 (RAD57, 1)
- (23) エレクトリックの写真版あるいはファクシミリ版が刊行されてい
- (24) この読みについては Lopez, *BIOr*. 45, 1988, 551 を見よ
- (25) 疑問のある例として O. Cairo CGC25290bis に *hštr 6 šbd 2 (nw n) šwt sw 23* として *nbw* と読める例がある。但しこの例は Janssen がヒエログリフ翻字が不十分な例として挙げており、*šwt* はなくして *šw* という動詞である可能性もあると思われるが、刊行がヒエログリフ翻字のみで写真版がなく他に確認の方法がないためひとまず *šwt* 及び *šw* と留める (M.G. Daressy, *Catalogue général des antiquités égyptiennes du Musée du Caire*, Nos. 25001-25385, Le Caire 1901, p.74.)。Janssen は “The Year of the Strikes”, BSEG 16, 1992, p.49, n.58 及び Černý のノートブックに *šwt* という例が「壁を越えた」という例に入ると指摘している。もしこの見解が正しいとするならば、この O. Cairo CGC25290bis はネクロポリスジャーナルと呼ばれる史料に分類される内容であり、ラメセス四世治世六年にも「壁を越える」ということが見られたことになる。またこれ以外にも「壁」という語は見られるが、文字テキストであったり、O. Ashmolean Mus. 1945, 39, rt. 17-18; 22-23 にも見られるように *hr* *tr m dr sni nb-wmn = ft; nbw... iw = ftprš wd; iw w-imb hšy m pšy = fud; iw = i kd = f* 「*nbw*」は「壁を越えて... 彼はこの倉庫に入ってきた。彼の倉庫の一つの壁が倒れたので、私はそれを建て直した」というように全く個人のベースのものであったりいざれにしろ彼らの本来の仕事とは関連のないコンテキストで用いられていたためここでは挙げなかった。
- (26) 文中の目的語には必ずしもなっていない。
- (27) *Wb.* III, 483,
- (28) ヘルリン大辞典のカードは *sn* という語の見出しのもとに見いだせるようになっており、ダレロ・ローマンの時期には *sn* という綴りは見られなくなり、*ss* という綴りがもっぱら用いられるよ

うになるがそれより前の時期にあっては両者の語が区別しないで用いられていると解釈している (Wb. III, 454ff.)。両者の語の区別が果たして別の語であるのかそれとも異綴りであるのかという問題は本稿では触れないことにするが、*ss* という語で綴られる場合直接目的語の形式で *nb* 「壁」あるいは *htm* 「ある種の倉庫」という語をとって「(壁など)を越える、通り過ぎる」という意味で見られる場合が多く、一方 *sz* という語の場合は前置詞 *hr* などを伴って「(しばしば)のところを通り過ぎる」という意味で用いられることが多いような印象を受ける。しかしこれが単なる偶然によるものであるのか他の要因によるものであるのかには判断できない。

(29) 以下の例は全てベルリン大辞典のカード (Wörterbuch Zetteln) に拠った。

(30) 少なくともこの刊行に見る限りでは三日という日付の後に *ss* と読める語があり、その後には数字の一〇と思われるサインが読める。この数字の表記からして日付などを表す場合ではない場合にしばしば用いられる書き方 (cf. Möller, *Hieratische Palaeographie*, 3 Bde, 1927, Nr. 263.) であるが、この表記法自体規則づらえるほどのものではない。このパピルスの刊行は非常に古いものであり、しばしばはなはな不十分と言われている。しかしオリジナルのパピルスを披見する機会がないためやむを得ずこの刊行に拠らざるを得ず、文意を判断しかねるのは残念なことである。

(31) この分言はカルナク神殿で二箇所、ルクソール神殿で二箇所、*Chester Beatty* III: vs. の計五箇所において見られ、その全ての例で動詞は *ss* という綴りを用いている。

(32) Janssen, J. J., "The Year of the Strikes", *BSEF* 16, 1992, 41-49.

(33) *bskt* という語の後に容器のサインが読める。もしこの容器のサインを *tblw* と読むとすれば、*tblw* というのは容器その物の名称としてもビールなどの容量を計量する単位としても見られる (Janssen,

Commodity Prices from the Ramesside Period, Leiden, 1975, 433 ff.)。「不足」と書かれてその後には数値が読み取れるため労働者による生産を管理した記録であろうかあるいは労働者への支給記録であろうか、内容が断片的すぎて判断しない。

(34) トリノストライキパピルス Pt. 2 にはジェムウ一月二日にペンタウェレットが死亡したという覚え書きがある。このグラフィートとトリノストライキパピルスにおいて言及されている人物が同一人物であるとすれば一三二日間の記録のズレがあることになる。グラフィートにおける名前は血縁関係の言及がなく単に「ペンタウェレットの死」とのみ言及がある。ペンタウェレットという人名は比較的にしばしば見られる人名であり、両者は別人である可能性もあるが現状としてはにわかには断定できない。尚 Černý は書記の prosopography の考察に Grafitto 18 を言及している (Černý, *Workmen*, 207-209.)。

(35) Spiegelberg, W., *OLZ* 5, (1902), 321-322; Černý, *BIFA O* 27 (1927), 179-180.

(36) Theban Grafitto O 1649; Černý, J. et Sadek, A. A., *Graffiti de la Montagne Thebaine*, IV/1, p. 5.

(37) *tr. n. hstbt 293bd 1 (n) prt sw 27* 「治世二九年ペント一月二七日に行つた／つくつた」と書かれているだけであり、この日にこの場所に来たということをついたのか、あるいは何か他のことをしたのか、何かを作つたのか具体的なことは一切不明である。

(38) 「壁を越えた」という言及あり。

(39) 宰相タアがラメサス三世の第一回セド祭のために南の地域の神像を取ってくるために南の地に赴つた。cf. Gardiner, *ZAS* 48 (1911) pp. 47ff.

(40) Janssen, J. J., "Background Information on the Strikes of Year 29 of Ramesses III", *Or. Ant.* 18, 1979, 301-308. Janssen は一九九二年の論文においても ODM 147 について言及し「薪の支給が遅れがあったことを指摘している」。しかし ODM 147 は年紀史料

- でなくこの史料中に見られる人物より同年代と推定しているらしい。
- (41) 但し問題がないわけでもない。従来伝統的にこの種の史料は薪が当局より労働者に支給されたものであるという大前提のもとに論が進められている。この想定が正しいならば労働者自身の生活に直結する問題として考慮されるべきである。しかしこの薪がどの目的に供されたか明確な史料的な根拠を欠いており、労働者の生活ではなく労働者の仕事に関連したものであるとの解釈も依然として可能性としては考慮されるべきであろう。薪に関する史料を単純にすべて一律に考えていいのかという問題も併せて考える必要があるだろう。
- (42) O. Petrie 5
- (43) ODM 330
- (44) O. Mond 179
- (45) *Hieratische Papyrus aus den Königlichen Museen zu Berlin*, 5 Bde, Leipzig, 1911, Vol. III, pl. 36 a.; 英語訳 Edgerton, op. cit., p. 137.
- (46) Medinet Habu の 中 北 側 に ある ホル エム ハブ の 記 念 神 殿 の こ と
- (47) 拙稿「レル・エル・メディーナにおける穀物支給 (*diw*)」『オリエト』第三三卷第二号一九九〇年一一一九頁を見よ。特に支給量に つ い て は 一 一 一 五 頁 を 見 よ。
- (48) C. J. Eyre, "A 'Strike' Text from the Theban Necropolis" in Ruffie, J., Gaballa, G. A. and Kirichen, K. (ed.), *Orbis Aegyptiorum Speculum, Glimpses of Ancient Egypt: Studies in Honour of H. W. Fairman*, Warminster 1979, pp. 80-91.
- (49) Eyre, op. cit., 84, n. z.; Eyre が 挙 げ た 以 外 に ' P. BM 10042, 14, 7; P. d'Orb., 1, 10; 等 の 例 が 見 つ た せ ん 。' cf. Groll, S., *Non-verbal Sentence Patterns in Late Egyptian*, London, 1967, Chap. II ; Junge, F., *Neuägyptisch*, Wiesbaden, 1996, 180ff.